



思い出の研究者

神戸大学 経済経営研究所

教授 山地 秀俊

現役最後のコラム担当ということで、研究生活の様々な場で薫陶を受けた研究者の方々の思い出を書かせていただきたい。

薫陶を受けた研究者(1)

研究に関して多くのお教えやご助言をいただいた海外の先生方から語らせていただく。まずは、ロナルド・トビ、イリノイ大学教授。私は計4回イリノイ大学に出張しているが、1980年代初めに最初にイリノイ大学に出張した際に、歴史学部の近代アメリカ史の授業に出ていたとき、担当教授からトビ先生を紹介された。風貌からして日本語が通じるとはとても思えず、拙い英語で何を話したらいいか迷っていると「どうも、トビです」と挨拶され、それ以来三十数年、お付き合いというよりもお教えを乞うている。企業の公開する情報の中に会計情報以外に写真情報等を含めて解釈すべきこと、いわゆる図像学の面白さを教えてくれたのはトビ先生である。当然フォーコー的「言説分析」にも目を向けさせてくれた。『残像の墓標』はその成果である。図像学的研究も含めた朝鮮通信使の研究を基礎とする、「江戸時代に鎖国はなかった」というトビ先生の主張は日本史研究に大きな影響を与え鮮烈であった。そこから「鎖国」は明治政府の外交政策正当化のために作られた言説であるとするフォロアーらの主張にもつながる。明治期を理解するヒントになり、私と藤村聡准教授の『複式簿記・会計史と「合理性言説」』につながった。先生は会計に関する知識も豊富にあつて、私の問題意識を理解してくださっている。また中部地方の江戸時代の経済に関する先生の研究では、期せずして私の学部時代のゼミ教官であった小寺武四郎先生の祖先の経済活動について関心を持たれていた。世間は狭いと感じた。先生の還暦に際しては、研究所からオレゴン大学のジェフリー・ヘインズ教授と私で還暦記念論文集と研究書を兼ねた *Image and Identity* を刊行した。今を時めくオースリン教授にも投稿していただいた。

次に井尻雄士カーネギーメロン大学教授。研究所にも何度か客員教授としておいで頂いて、私は自分の発表を聴いていただく機会にも恵まれた。その際に、「山地君の考えは、例えて言うならば、山火事の時にしか芽を吹かず通常はそのまま枯れてしまう松ぼっくりのようだ」と言われた。ほめ言葉だと今でも勝手に解釈している。しかしどうやら山火事は起きなかったようである。「第1回神戸フォーラム」の成果を *Business Behavior and Information* と題してカーネギーメロン大学から中野勲先生と共編著で出版していただいた。

シャム・サンダー、カーネギーメロン大学、イェール大学教授。1995年の阪神淡路大震災の折に地震の影響冷めやらぬときに、研究所の外国人教授として3か月間滞在していただいた。1991年の「第1回神戸フォーラム」に来ていただいたので、それ以来今日まで、ご指導をいただいている。

1995 年に来られた時に、「私をどの顔で(何の研究者として)呼んだのか」と問われて、私としてはカーネギーメロン大での井尻先生の弟子でもあり会計学者に決まっているだろうといった気持で、先生の質問の真意が分からなかった。そこで3か月の間会計学のセミナーやフォーラムを開催してご指導を賜ったが(成果として *Japanese Style of Business Accounting*, 『企業会計の経済学的分析』, 邦訳書『会計とコントロールの理論』を刊行した), 帰国に際して先生は大量の抜き刷りを置いていかれた。情けない話, 抜き刷りを前にしたときに初めて実験経済学というジャンルがあることを知り, 会計学にも大きな影響を与えていることが分かった。抜き刷りには, ゴード=サンダー, マリモン=サンダー, プロット=サンダーの連名による多くの論文が含まれていた。日本では西條先生が活躍を始めたばかりのころである。後日, 事務長だった海野さんから, 「山地先生もその時から実験に集中していれば一流の研究者になったのに」ときつい皮肉を言われた。研究者に面と向かって皮肉を言う事務長は後にも先にも海野さんだけであるが, 地震直後で外国人の入国が大幅に制限されて, 実現困難と思われたサンダー教授の招聘を, 文字通り奥の手を出して可能にしてくれて頭が上がらない。サンダー教授が3か月の招聘期間を終えて帰国される際は, 新館二階の会議室に数十名の研究者や事務の方々が集まって, 盛大な送別会を開催した。中野勲先生はもちろんであるが, カーネギーメロン大学 OB の豊田先生(経済学部教授)や準 OB の吉原先生にも参加していただいた。サンダー先生には, 文字通り実験に目を向けていただいた。今日細々と(脳)実験をやっているのも先生のおかげである。「山地は私を会計学や実験で驚かすことはできないから, 写真情報公開をやれ」と冗談半分にいつも言われる。しかしながら以後も英語査読付き会計学雑誌(*The Japanese Accounting Review*)の発刊等で一方ならぬお世話になっている。

ロナルド・トビ先生とシャム・サンダー先生は, 研究領域も異なるが, 「言説分析」には否定的ではないように思われる。サンダー先生は市場実験で市場が均衡に到達するにはインテリジェンスは必要条件でないことを示したうえで, 19 世紀以来の西洋インテリジェンスの中核である「合理性」概念は 20 世紀に経済学が普及させようとした最も大きな「言説」であるとする。トビ先生やサンダー先生の主張は, 私が魅かれる社会的構築主義とも親和性があり, お二人の影響を比較的抵抗なく受け入れている, というよりも私が勝手にお二人の立場を私の研究に無矛盾なように解釈している。

薫陶を受けた研究者(2)

続いてより身近で薫陶を受けた先生方。まず大学院の指導教官であった谷端長神戸大学経営学部教授。指導教官であったが, 弟子と会計学の話をするのを嫌がった先生であった。一度も会計学の議論をした記憶がない。しかし先生がお元気な時には, 私の書いた論文をすべて原稿段階で読んで朱を入れてくださった。思い出としては, 私の手書き文字では読みにくくてご迷惑であろうと, 当時高価な NEC のプリンターを購入し出力した論文下書きを持参すると, 「私にはこれでいいが, いずれ手書きで清書するのだろう」と諭された。時代を感じた。

中野勲経済経営研究所教授。学問に真摯で, 私の気に染まぬ仕事を強いられたことは一度もなかった。折に触れて私の書いたものを書評等で褒めていただいた。悪いところは一切言わず, 数少なく探すのに難しく著者本人も気づかない良いところをあえて見出し書評を書いていただいた。谷端, 中野両先生の影響から, 私は, 学生には一切研究方向をこうしろとかいわない, また仕事は手伝わせない, という方針にした。その方針が成功したか否かは分からない。

津守常弘九州大学経済学部教授。「情報公開」問題の重要性を常に先行して教えていただいた

先生である。大学院時代から、不遜な私は「情報公開」の問題に気付いた会計学者はいないだろうと高を括っていたが、津守説に出会って見事に打ち砕かれた。以後は、先生との違いを意識する書き方になった。当初はウエーバー的な理念(民主主義)の強調によって(『会計情報公開論』、『情報公開制度としての現代会計』)、続いてファイナンス理論を援用した会計情報公開問題の実証によって(『会計情報公開制度の実証的研究』、『労使交渉と会計情報公開』)、そして徐々に社会的構築主義や実験へと方法がシフトしたのは、津守説との区別を意識したことも大きな要因であったように思われる。

経営学者の吉原英樹経済経営研究所教授。折に触れて先生独特の言い回しで私の研究にコメントを下さっている。第1回、第6回の「神戸フォーラム」にもご参加いただいた。先生との思い出は韓国の慶北大学との交流セミナーで何度か大邱にご一緒し、途中で現代自動車の工場見学にも同行させていただいたこと、また先生が所長を退かれた折に、公用旅券で中国の深圳特区に連れていっていただいたことが挙げられる。お昼時に深圳の工場から一斉に大量の労働者が同じ真鍮のボールと箸を手を持って出てきて食事に向かう迫力に圧倒されたが、そのときシャッターを切れなかったのが今でも心残りである。

次は中野常男経営学部教授。1歳年上(中野先生に言わせれば半年)の先輩である。四十年以上の付き合いになる。最近では珍しいことであるが、先生は優秀であったので修士課程修了で助手に採用された。先生の研究スタンスは今日までストイックなまでに会計史研究に限定されている。どちらかといえば気の多い私のスタンスとは異なり、先生から無言の批判を受け続けてきたように思える。先生は助手になってからも多忙であったので、先生の博士課程経過論文は私がアルバイトとして清書した。当時としては破格の1万円を頂戴し、小林旭のレコードも買ってもらった記憶がある。以後冗談で「中野先生の博士課程経過論文は僕が書いた」と私が言うと、先生はいつも笑いながら「清書したと言ってくれ」と返されるのが常であったが、定年退官後、国士館に移られてこうした会話ができないのは寂しい限りである。

すれ違った研究者

まずはリチャード・サイアート、カーネギー・メロン大学教授。「サイアート=マーチ」の組織論で知られる経営学組織論の大スターである。1990年代の半ばに、カーネギーメロン大学で、サンダー先生の紹介で昼食をご一緒しながらお話を伺った。しかし組織論の知識が皆無の私には何を話しているかわからずに、ルーズベルト時代の政府写真収集機関であった農業安定局(Farm Security Administration; FSA)の写真の話に向けてみた。すると偶然にも身内の方がかつて関係していたということでFSAの写真の議論で盛り上がった。本来の組織論の話は私の無知で出来なかった。

次にパーン・スミス、アリゾナ大学教授。これまた言わずと知れた実験経済学の大スターで2002年のノーベル経済学賞受賞者である。2000年代中頃に教授を招聘して実験経済学のコンファレンスを開く委員会に参画させていただき、その際にサンダー先生に山地は会計学者であり写真研究者でもあると先生に紹介された。先生は人のいいカウボーイという印象であった。この時も実験については私の力不足で話をできなかった。しかしコンファレンスの成果は京都産大の小田宗兵衛教授の編集で、*Developments on Experimental Economics* として刊行された。

次は、デビッド・ナイ、南デンマーク大学教授。ヨーロッパにおけるアメリカ研究の第一人者である。

先生の本を翻訳するに際して、シカゴのホテルで10時間ほど文字通り缶詰になってセミナーをしていただき、カミさんと拝聴した。カミさんとの共訳、『写真イメージの世界』になった。その後、次々と出版される先生の研究成果を咀嚼していくことが難しく疎遠になり、連絡を取り続けられなかったことが残念でならない。

次は、**フィリップ・ブラウン**、ウエスタン・オーストラリア大学教授。先生が1968年に *Journal of Accounting Research* に掲載した論文が、以後半世紀近く会計学研究に与えた影響の大きさについては周知のとおりである。先生に本を翻訳させていただけないかとメールでお願いして、音川和久教授と一緒に、『資本市場理論に基づく会計学入門』を刊行した。その縁で第4回 TJAR コンファレンスに来ていただき、キーノートスピーチをし、論文も投稿していただいた。

置塩信雄 神戸大学経済学部教授。オキシオ・マルキストの元祖である。先生の理論は現在でも一定の影響がある。教官食堂で同じテーブルで食事を一緒にしていた折に、私が「この頃の学生は勉強をしなくなった」と発言すると、「だからあなたが大学で教えている」と切り返された。きつい一言であった。その置塩教授と同時に経営学部の松田和久教授が定年退官された折に、ちょうど神戸大学の労働組合副委員長をしていた私は、廣森委員長の計らいで、組合の送別会でお二人に送辞を述べる大役を仰せつかった。壇上に出て行った私を見た松田先生の第一声が「なんやアಂತカ」であった。統計学の授業でよほどご迷惑をおかけしたのであろうと想像した。

西塚泰美 学長。神戸大学で最もノーベル賞に近かった研究者である。同じ大学でありながら、もちろん親しくお話しする機会などはなかったが、部局長が集まる食事会で、末席中の末席にいた私の隣に、遅れて来られた先生がたまたまお座りになったので、脳実験についてお話しすると、開口一番「人間そんなに簡単なものやおまへんで」と大阪弁で返されて、二の句が継げなかった。これも記憶に残る一言であった。

最後は番外編。1980年代の初めに、初めてイリノイ大学に留学した際にまったくもっての偶然で出会った大スター、**ジョン・バーディーン** (名誉) 教授。教授は1956年と1972年に2度ノーベル物理学賞を受賞している。当時イリノイ大学では、時々大学関係者を集めて大学主催の大規模パーティーが開催されていた。たまたま私とバーディーン (名誉) 教授が集合時間より早めに会場に到着して、待ち時間の間少しお話をしてもらった。時間になると私は日本人客員研究者用の末席に案内されて、教授はそのままVIP席に残られた。ただそれだけのことであったが、研究者になりたての私はノーベル賞学者と、偶然からとはいえお話しできたことが嬉しくて、今でも印象に残っている。もちろん教授の研究成果については全く分からなかった。しかしMRI (magnetic resonance imaging; 核磁気共鳴画像法) 技術の基本はバーディーン教授の物理学における成果に依拠しているとか。今、私が細々とfMRIを用いた脳実験をやっているのも、文字通り何かの縁である。

現役最後のコラム担当で急遽こうした内容を思いついて、思い出すままにお許しも得ずに先生方のお名前を列挙させていただき思い出話を記したが、資料が残っているわけでもないのと思わぬ間違いがあるかもしれない。それはご容赦いただきたい。またここで触れさせていただかなかった先生方にはお世話になっていないというのでは決してなく、文字通り思いつくままに書かせていただいたにすぎない。影響を受けた年下の研究者についても、触れなかった。